

モラル・サイエンスと道徳および信仰

—— 広池千九郎の「最高道徳」と大塚久雄『社会科学の方法』をめぐる ——

永 安 幸 正

目 次

- 一、道徳価値と宗教価値の背反
- 二、最高道徳における信仰と道徳の関係
- 三、神観念の革命による道徳・宗教分裂の止揚
- 四、新たな意味的宇宙論（コスモロジー）の展開
- 五、道徳の実践論 —— 贖罪（義務）先行と正義及び慈悲
- 六、人間進化の理想 —— 聖人の徳の称賛と永世論
- 七、道徳進化の道

一、道徳価値と宗教価値の背反

今、人類文明の危機が叫ばれている。核の問題は言うに及ばず、近年の地球環境問題、グローバル経済をとっても、地球的、さては宇宙的な意識までもが、われわれ一人一人の人間に求められている。このような時にあって、次のような歴史論があることに注目したい。

「西洋の文明はその根本（神）に根ざしており、東洋の文明は最初は根本（神）にその源を置きたれど、中途よりその根本（神）を忘失したために、先優者（東洋）がかえって後進者（西洋）に遅れたものかと考えられます。」（広池千九郎『道徳科学の論文』広池学園出版部、⑦二五七ページ。以下巻数のみ示す。）

思い起こされるのは、世界宗教の社会学を樹立したマックス・ウェーバーが、人類史の行程において、ときおり宗教という形での高い理念を提供する人々が現れ、その理念が人々の内面に作用し、内面を作り変え、歴史の行程に転換手の役割を演じる、と述べていることである。

実は、人類は生き方の問題として、つねに二元的な問いの前に立っている。形而上と形而下との、現世と来世との、合理と非合理とのそれである。天上の摂理への問いと、地上世俗の生への問いである。宗教か科学か、信仰か道徳かという対比、というよりむしろ対立は、古くかつ常に新しい。かの宗教裁判に際しての「それでも地球は動く」という言葉に象徴されるように、認識の問題としても、またそれに基づく実践（生活）としても、この関連は深い問題性を秘めているのである。

顧みれば、人間の相互関係を研究する社会科学の源流としてのモラル・サイエンスにも、この対立は秘められていた。それはアダム・スミスにその最も典型的な体系の一つが見出されるように、そこでは「人間の徳」(ヴァーチュ)や「品性」(キャラクター)を問題にしており、徳や品性を高めることが人間の現世における幸せをもたらすかどうか、という問いを立てた。そしてこの徳とか品性というものが、まさにこうした宗教・信仰と科学・道徳とのあいだの対立的な関連を背後に秘めているのである。すなわちスミスは、神とか神の摂理というような言葉を慎重に避けて、かわりに「自然」(nature)とか「一般法則」(general rule)という言葉を選んで、そこには当時における宗教というものの問題性をスミスが見詰めていて、それを学問的に超えて行くという意図が読み取れる。スミスの立場は「理神論」(deism)といわれるものであった (*Theory of Moral Sentiments*)。デイズムとは、神は宇宙を造ったが、しかし背景に退き、あとは宇宙自身がひとりで行なう、という考えである。この科学と宗教、道徳と信仰というような対立的な関連の問題は、人間生活のあらゆる分野にわたるのである。

人間といっても個人だけではなく、家族とか企業とか国家とか民族とか、さらには文明・文化などのように、個人を超越する存在も考察している。人間が生きているという現実には、そのように広がりをもつからである。また色々な異なる職業とか、あるいは職業を離れた遊びとかのような分野にも、それはかわりがある。

しばしば聞かれることだが、道徳は程度が低くて宗教は高等であるという意見が多い。特に、西洋ではキリスト教がずっと支配して来たから、その来世信仰の解釈の仕方によってであろうと思うが、現実に人間が生きているという原理とどうか、実践そのものである道徳(あるいは道といふべきか)は、宗教(信仰)よりも価値が低いとする見解がかなり多くある。律法主義者であるパリサイ人を批判する点で殊に厳しいキリスト教に、そうした傾向が強いようである。また、なにも独りキリスト教のみではなく、一般に宗教研究家なしは信仰家——私自身こういう呼び方が許されるかどうか自信はない——にはそのように主張せられる方が少なくない。だが、はたしてそのように道徳の価値をおとすかどうか。道徳はなにも必然的に律法主義ではない。実はイエス自身は「律法の完成」と「隣人愛」の実行を説き、「道徳」をおとすのではないのである。神への信仰に立つ道徳を説いたのであった。現実の人間生活にとっては、道徳の排斥とか批難ではなく、その質的向上こそが求められるのではないだろうか。

以下では、広池千九郎のモラロジー(道徳科学)の体系における問題提起を素材に、モラル・サイエンスの視点から、道徳の構造を宗教とのかかわりで考察してみたい。これは、経済と宗教という二極的な要因が、人間社会の論理において果たす役割を明らかにするための基本である。

〈注〉

(1) 大塚久雄教授は、その深い学殖を踏まえて、名著『社会科学の方法』(岩波新書)において、ウェーバーとマルクスに依りつつ、宗教と、人間社会の論理を説明する社

会科学との関連を、実に分かりやすく論じている。今回は、長年親しんできた教授のこの著書を手掛かりにしつつ、問題に取り組んでみたいと思う。

二、最高道徳における信仰と道徳の関係

広池千九郎(法学博士)の「モラロジー」(理論)と「最高道徳」(実践)は、近代西洋のモラル・サイエンスの系統を引きながらも、東洋学的な知的要素を色濃く盛り込んで、まさしく道徳の価値を極めて高く評価し、道徳の質的革新を提唱して独自の総合的体系を目指したものである。それは、一方に多くの現実の宗教の欠陥を批判するとともに、またしっかりと信託に基づき道徳の実行ということを根本的な態度とする。

広池は次のようにいう。

「神は必ずしも宗教団体の占有ではなく、すべて政治・法律・道徳及び宗教の源であるのです。故に、神を信じて聖人の教訓を守り、道徳的な生活をなすことはあえて宗教を俟たずして出来ることであります。」(⑦二五六ページ)

モラロジーは科学として、宗教の価値と権威を真に高めるともいつている。ゆえに、われわれが初めに掲げた道徳と宗教の関連についての問いは、モラロジーの前に全面的に立ち現れているのである。つまり、モラロジーとその指し示す道徳(最高道徳)は、信仰・宗教であるのか、ないのか。こういう問題が問われる。

これは素朴な問いであるが、しかし以上に見た深い意味を秘めた問いである。ただ、現代一般の第三者の目からするならば、そうした広池のいう道徳が「信仰もしくは宗教ではない」とするのは一種の弁解とも受け取られ

よう。なぜなら、広池のモラロジーの著作には盛んに神という言葉が出て来るし、最高道徳はまさしく神と世界宗教の開祖を含む諸聖人に淵源しているとせられるからである。

この点にかんして筆者の結論を先に述べるならば、広池の道徳体系は、宗教と科学、信仰と道徳の再結合、より正確には両者を質的に変革しつつ統合するという意図が込められているものと考えられるのである。

広池自身においては、「神」への言及は、すでに最高道徳とは何かの説明において現れている。その記述を示すと、以下のようになる。

最高道徳とは、「世界の諸聖人が宇宙根本唯一の神の心(慈悲心)を体得して実現せるところの道徳」である(⑦四ページ)。

ここに「聖人」というのは、広池においては、「神の心」を受けてこの現実の人間社会で最高の生き方を実現して一般人を教育した人々であり、世界的には人類の教師とも称えられる孔子、釈迦、ソクラテス、イエス、そして日本としては天照大神などを指すとされる。このほかにも考えられているが、ウェーバー的にいえば先に述べたような理念の担い手であり、歴史上、巨大な転軸手の役割を演じた人々であるといえよう。

しかし、なお疑問が湧くだろう。道徳を論じるのに、なぜ神ということに言及しなくてはならないのか。神がなければ人類最高の道徳はありえないのだろうか。新興宗教が繁栄しつつも同時に宗教への懐疑が蔓延している現代日本では、また逆に確立した一神教的宗教が今も支配する世界の国々では、こうした「新たに定義された唯一神」への信仰を基礎とする「最高道徳」というものの性質を、人々に説得できるだろうか。あるいは逆に、神をとりあげることがかえって良いのかもしれない。むしろそのほうが、人々の深い欲求に応えるのかもしれない。人間は、形而下のそれとともに、形而上的な問いを捨てるわけにいかないのかもしれない。

かくて、「宗教か否か」にたいする広池の対応の仕方は、次のとおりである。

「道徳」とは他の個人、国家、もしくは社会にたいする慈悲の精神作用と行為のことであり、「信仰」とは神もしくは仏に信頼することである。神の心を体得し且つ実行するのが神にたいする真の信仰である。従来の信仰は、神を礼拝し祈禱することが主で、「神にたいして幸福を与えられんことを要求する」のである(⑦二四四―四四五ページ)。

「神の信仰」はなにも宗教(団体)の専有ではなく、人類に普遍的である。宗教は多くが宇宙の真理の部分的な認識に立つものであり、科学と対立したりするが、最高道徳は真理の全体を認識し、実行するものである(①七四ページ)。

ここは、一般には議論を呼ぶところであろう。宗教とは、宗教団体の活動としての宗教を指すのか、また非団体的信仰活動も宗教と見るのかなどにより、答えが違ってくる。たとえば、戦前までの明治憲法体制のもとでは、国家神道が宗教か否かについて、論争が続いた。政府はもちろん宗教ではないとしてきた。が、柳田国男などは、それはやはり宗教であるとし、非宗教説を批判していた。広池は、宗教ではないという解釈であった。いずれとなるかは、宗教の定義いかによるであろう。広池の言いたいことは、偏狭な宗教団体が真理を独占するのではなく、だれでも真の信仰に基づいて道徳を行えるということであり、優れた宗教を否定するものではない。

次の課題は、道徳の科学的基礎づけ、なかんづく神の認識の問題である。スミスなどのモラル・サイエンスは、どちらかというところとした神とかいった超越的世界から離れる方向性をもっていた。広池のモラロジー(モラル・サイエンス)は、知的体系として一面では「科学性」を主張する。人間の精神と行為に関する因果律の科学的研究がそれである。人間が何を考え行為するかにより、結果が異なるということである。それと不可分の関係で、

最高道徳においては「信仰」について論じ、それが科学的かつ実際のであり(⑦二四三―四四ページ)、またその道徳は合理的であるともされる。

「最高道徳は、科学の原理に立脚して、世界諸聖人の実行上に一貫せる道徳の最高原理を実行しようとするのであります。すなわち一方には神を信じ、聖人の教えに従い、科学に一致する精神的諸法則を守ると同時に、物質的においても正当なる科学的方法を用うるのであります。」(⑨三八八―八九ページ)。

広池は、非合理的信仰的治癒法等を否定し、科学的な安心立命の方法を基本とすると述べている。ウェーバーのいわゆる神秘的非合理的な魔術の世界(Zaubergarten)からの解放たる合理化(Rationalisierung)の立場に近い。

他方、道徳の研究においては、科学のみでなく日常の経験や歴史の事実も参照される。これらは科学的、合理的とされる最高道徳といかなる関係にあるのだろうか。これにたいする広池の対応は、大要次のとおりである。

神の認め方について、いまだ科学は万能ではない。宇宙の「真理」に到達するには、天啓と、聖人・偉人・宗教の開祖などの教訓と、一般多数人の経験と、これに加えて哲学及び科学の研究、という四つの方法が統合的に適用されるべきである(①六二ページ以下)。

そこから、次のように考える。

モラロジーは、神の作用かと信ぜられるところの宇宙自然の秩序ある運行から推して、絶対神が宇宙の内もしくは外に存在すると公理的に仮定する(⑦二二二ページ)。

本体の作用を認め、その因果律的確偉大な勢力を崇拜して、神と思惟するのは不合理ではない(⑦二二三ページ)。

これは一応、普遍性を求める科学的・哲学的な方法に立つ推論である。しかしさらに、以下にみるように他の方法も採用されている。

神の存在は、科学では直接証明できなくとも、世界諸聖人の教説からと、一般人の経験とから、認められる
 (⑦)二三一三四、二四八ページ)。

神の存在にかんする議論は、広池千九郎自身述べているように、科学的にのみでは完結しない性質のものであろう。ここには、合理か不合理か非合理か、科学か信仰か、経験か実験か体験か、といった人間の認識能力、認識方法に関するあらゆる側面が、最も先鋭な形で現れてくるのである。

しかしともかく、神の原理の示すところは、結局聖人の教えに従って、直ちに神が存在すると認め、その働き、つまり慈悲を人間が実行するにある。

三、神観念の革命による道徳・宗教分裂の止揚

このとき、重要な点に注目しなくてはならない。すなわち、広池千九郎の最高道徳では、合理的な科学の立場からすべての異なる神(仏)の相対化という「神観念の革命」を行う。それによって、まずもろもろの宗教間の、あるいは神々(諸仏)の間の争いに終始符を打ちたいとする。広池は次のように述べている。

神は宇宙根本唯一である。それは宇宙の本体(リアリティ)であって、神仏その他、各民族や宗教での呼び名は、この同じ本体についての異名である。本体はそれらを超越して「絶対神」(absolute God)と名づける。すなわちいわく、

「最高道徳は宇宙根本唯一の神 (the basis of the universe, the only God) の心を体得実現せる世界諸聖人の

実行せるところの道徳に一貫せる最高原理であります。故に、その当然の結果として、神の存在を認むるのであります。しこうしてここにいわゆる宇宙根本唯一の神は宇宙の本体を指すのであります。この本体は従来世界の各民族及び各宗教団体において、おのおのその名と性質とを異にして、信仰の対象とせられておるのであります。しかるに今最高道徳は、各民族及び各宗教団体の信仰を超越し、人類に対して普遍性を有するところの人間生活の規準なるがゆえに、ある民族もしくはある宗教団体において認むるところのある一つの名を借り来って、本体を命名することは出来ませぬ。それ故に、最高道徳におけるいわゆる本体の名は、その各団体に呼ぶところの名に対して特にこれを絶対神 (the absolute God) と命名したのであります。」

(⑦)二三一三四ページ)

広池は、宇宙自然の秩序ある運行から推して、右のような意味の神が「宇宙の内もしくは外に存在するものと公理的に仮定するのであります」としている。これは、どの名称を冠した神(仏)が尊いかというような「神々の争い」(マックス・ウェーバー)を越えていくことを期待するものである。

このような考え方は、非合理的なものを合理的に説明するものであるといえる。これは、のちに説明するが、具体的なものの「抽象化による普遍化・絶対化」ともいうべき論理のつとつた見方であり、物事を新たな次元で統合するための方法論が表れているのである。

それからもうひとつ、広池は、「現神」——従来世界の諸宗教では、現実にその肉体をこの世に現して働いたところの神であり、日本では「あきつみかみ」と称した——という範型(パラダイム)を述べている。それは、絶大なる道徳実行の結果によって、「宇宙根本唯一の神と同一視せられるようになったもの」であり、孔子、釈迦、イエス・キリスト、ソクラテスなどは、神に準じて尊敬せられるようになったものである。すなわち、

「宇宙根本唯一の神はこの宇宙の実質内容を形作るもの」であり、宇宙の一切を支配し、人類はじめ森羅万象の生命をその内部より直接に支配し¹⁾ていくものである。

「現神はその徳高くして、宇宙根本の神と同じく、われわれ人類を慈愛し、われわれ人類の生存発達及び幸福を増進せんことを念として、われわれ人類のために無我の努力をなしてこの世を去られ、もってわれわれ人類をしてその精神的及び物質的生活の法則を知らしめ、且つわれわれ人類が今日かくのごとく幸福を享受し得るとき施設及び経営をなしてこれを遺されたのであります。これによりて、われわれ人類ははじめて神の存在と神の法則とを知り、且つ現実における幸福を享受し得るのであります。」(⑦二三〇ページ)

そして、広池によれば、本体は、われわれ人間の「肉体の細胞の内部に宿ってわれわれの生命を守護するもの」であり、現神は肉体の外部からわれわれの肉体と生命を守護するものであるといえる。ゆえにわれわれは、この現神の偉大な人格、絶大な威力に感激し、憧憬して、その慈悲心に同化していく。人間は、本体と、現神との双方を不可欠とするのであると。従来は、現神のみ認めて根本の神を無視するとか、あるいは根本の神のみ認めて現神を排斥するなどしたが、それは間違いであったという。この点は、歴史の行く末を占ううえで、極めて重大な意味を秘めているところである。¹⁾

さらに、道徳との関係で、信仰というものをどのように位置付けるかが問われる。広池はいう、これから最高道徳では、世界諸聖人の人格を通じて根本の本体に接する。特定の宗教団体の神は、これを「その心中に潜在的に信仰するにとどめ、もしくはさもなくても穏和・公平の態度を保持するようになるのであります」という(⑦三九八―九九ページ)。いわく、

「道徳は顕在的であり、信仰は潜在的である。」科学的・教育的・普遍的性質を帯びるものは顕在的で、信仰的・宗教的・一部分的性質を帯びるものは潜在的である(⑦三九八ページ)。

「神はただ一つ」であるが、これを信仰の対象とする宗教は千差万別である。しかし、モラロジーと最高道徳では「深く各人の信仰に干渉することと態度をば執らぬのであります。」(⑦二二六ページ)

ちなみにまた、最高道徳では、神を「礼拝」するが、それは人間が普通の心を改め、神の心(慈悲)に同化してそれを道徳として実行することを誓う形式であるとされ、広池は以下のように説明している。広池は、イエスの「あなたは祈るとき、自分の部屋に入り、戸を閉じて、隠れたところにおいてになるあなたの父に祈りなさい云々」(マタイ六・六)という教えを引き、将来の礼拝法として参考になるとしている。しかし、たとえばアーメンというかとか、拍手をうつか、地に伏すとかなど、礼拝の形式には重きをおかない。それはいずれであってもよい。精神が肝腎である。精神の内容は、次のようにするとされるのである。

「まず神に感謝し、次に自己の精神及び行為の改造を誓い、次に国の伝統及び家の伝統の幸福を願い、次に世界の平和を願い、次に最高道徳の伝統及びその実行の仲間の幸福を願い、万一、伝統の先輩もしくは最高道徳の実行者の仲間に故障のあるときには、その回復を願い、自己に故障あれば自己の精神及び行為の改造を誓い、且つ故障の有無にかかわらず、すべて人心の開発もしくは救済に対して更にいっそうの努力をいたします」ということを心の底より誓うのであります。かくて自分のことは一切祈願せぬのであります。」(⑦二五三―五四ページ)

ここに「伝統」というのは、広池独自の意味をこめて使われているものであって、人間社会の極めて重要な構成要因であり、われわれの命を育て上げてくれた恩人の系列のことである(後述五節の注を参照)。この内容を込めた祈りは、心を広くし、かつ要点をつかんでいて偉大な効果を生むことを、筆者自身、年来経験して来ている。

このように、広池において特徴的なことは、宗教・信仰の潜在化という論理の提案である。これは広池自身の体験からも来ているが、人類にとつて極めて重要な実践的意味を秘めているのではないか。

現代、世界の欧米型の先進国では、国家の宗教からの自由、あるいは信教の自由という近代の政治原理は、宗教を否定するのではなく、むしろ私的世界に局限することで、真に信仰を生かすという意図をもつ。ゆえに、以上は現代人にとり信仰とか宗教とかいうものについての革命的提案ではないだろうか。それは、超越世界にかかわる世界観の闘争（神々の争い）から脱却する唯一の道である。その道は、社会主義各国がしばしば試みては失敗して来たような宗教禁圧とかの方法で実現出来るものではない。むしろ各人、各文化が各々の超越世界をもちながら、それを背後に潜めて、現実世界においては、実践的な「道徳」の次元で行為する。かくて平和的、共存的な地平がひらかれるであろう（潜在的信仰・潜在的伝統という考えについては⑦三八六ページ以下を参照）。

このような信仰の基礎付けと、その潜在化という論理は、抽象化と記号化の論理である。あたかもどんな事物でも、その異なる特性いかに問わず、共通の「シンボル」（記号）と「コード」により抽象化して表象し、現実の秩序ある社会空間を形成し秩序づけていけるが、それと同一の論理であるといえる（⑦七二―七三ページ）。記号とコードには、貨幣（普遍的価値尺度）、度量衡、あるいは社会的ルール（法や慣習）などがある。どんな社会にも貨幣があり、一般的にいえば人間社会に記号があるのは、一体なぜかを考えてみなければならぬ。

またこれは、近代自由主義の社会システムの論理とも適合する。近代の人格の考えでは、内面の信条などいかにかわからず、その内的自由を保証し、すべて人間を抽象化し、その抽象的人間に、普遍的に同等な人権と尊厳をもつ人格を認め、法の下の平等を徹底して社会を構成する。これが政治の宗教からの自由、逆にまた宗教の政治からの自由を支える論理である。

かくして、最高道徳は信仰を背景にもつ道徳である。広池によれば、一般に道徳には三つある。

- ① 単に信仰のみで道徳に欠ける人
- ② 信仰なきも正しい理性によって道徳的行為をなす人
- ③ そして最高道徳がこれにあたるが、精神作用の基礎を信仰に置き、その行為の基礎を敬虔なる精神作用と正しき理性の判断との上に置く人

この最高道徳的生き方は、いいかえると「信念に基づく道徳的生活」（⑦二四〇ページ）であり、「内心深く神を信じて、その日常生活をすべて神の法則に依拠して進む」のであるともいわれる（⑦二四二ページ）。

今後人類に普遍的となる最高道徳は、道徳を信仰との関係において行うものであって、道徳と信仰の新たな結合 (religio) を樹立することになる。すなわち、宇宙根本唯一の神への信仰を基礎とする道徳実行である。

そのとき、各民族はその民族の代表的聖人を、一面では国民的に、また同時に人類の立場から、崇拝する。そして同時にひとしく世界の諸聖人すべての神霊を通じて、聖人の人格を通じて、神本体に接する。これは「古来の偏狭な信仰とはまったくその趣を異にするのであります」といわれる（⑦三九八―九九ページ）。

これは、文明と国家を単位として述べられているが、今日のように文明出合いの時代、これは各人がそれぞれの文明をもちながら、それとのおして同時に普遍的な地平に出会う道である。

広池千九郎は、こうして「抽象化による普遍化」の論理を、宗教と道徳について徹底したといえるのである。マックス・ウェーバーは、宗教とか思想の演じるパラドックスを衝いたが、その際いかにすれば普遍的な、争いのない世界に出られるかという問題を十分解かなかった。広池の以上の解答と比較してみられたい。

かくて最高道徳は、神・信仰・宗教の問題を避けて通るのでなく、神・信仰・宗教と関係する内面の多様な超

越世界の対立を超えて、道徳という現実の實踐世界での共存関係を造っていくためにこそ、争いの元となっている神の原理、信仰の問題を、かえって積極的に取り上げる。かくしてこそ現実世界の平和原理ともなるのである。科学は、理性の範囲では人類世界にこういう普遍的地平を開いて来たので、やはり宗教のみの支配した中世以前に比べると、人類精神の格段の進化があったことをそれは意味するのである。

信仰というような内面の世界での普遍的世界の探求は、だれも深く行わず、また成功してきてもないが、広池は新たな方法論をもって、そこに進み行くのである。

〈注〉

(1) 広池の指摘する現神の働きは、ウェーバーのいう「予

言者」(宗教的カリスマが多くはこれにあたる)の理論を想起させる。すなわち、人間社会に理念を持ち込み、人々の内的精神に作用して変革する予言には二つある。模範予言(exemplarische Prophetie)と「使徒予言」(Apostelprophetie)である。模範予言は「模範となるべき悟りの生活に入っている人々で、一般の人々はそれに学んでついていけばいい」のであるが、他方の使徒予言は「倫理予言」(ethische Prophetie)ともいい、「神の代言人として激しく悔い改めを迫ってくる」根源的に倫理的なものをもってわれわれに迫ってくる」のである。だから、双方で出来あがる社会の姿、歴史も違ったものになる(大

塚『社会科学の方法』一八二ページ)。

広池の最高道徳では、模範予言の側面と、科学のおよび経験的な基礎に立つ法則的な合理的根拠と、感化という情理円満な方法でもってする倫理的予言の側面とが、調和的に統合されている。ゆえに現世の合理化は行うのであるが、それも過激な方法でなく、迅速・確実・典雅・安全という方法による。広池はこうした道徳の叙述においては、まことに詳細を極め委曲を尽している。

四、新たな意味的宇宙論(コスモロジー)の展開

人間は、日々生きて行くうえで体系的、完結的な意味世界を求めたい。フランクフルがいったように、人間は「意味への意志」をもっている。現代では、神を否定する科学的世界観と、雑多な混入物を含む通俗的世界観とが、多くの人々の頭脳を支配しているが、現代人がそれだけでは物足りないと感じてきているのも、また確かな事実ではないだろうか。人々は、人生にしっかりと意味を賦与する座標系を探し求めているのではないか。

一九六〇年に大統領として登場し、アメリカ史における英雄的シンボルの一人となったジョン・F・ケネディは、「人生はアンフェアである」といつている。戦争に行つて戦死する人もいるし、傷つく人もいる。戦争に行かない人もいる。だが、人はみな何かの役割を演じているのであろう、と述懐している。彼自身早く逝ってしまったが、人々は彼への感動を忘れない。ケネディを通じて、何ほどの意味が現れ、語られたのであろうか。

そこで、広池の最高道徳における神の考えは、そうした現代人の「意味への意欲」に答えるものとなる。それはひとつの意味体系であり、あるいは意味体系を各人探求するための指針にもなる。具体的な内容は各人が人生において、実験しつつ満たしていくものであろう。

ここに、ウェーバーの問題にしたいわゆる「神義論」(Theodizee)というものがかわつてくる。それは、大塚久雄教授によれば、神が全能であり、また天地、世界に正しい理法が支配しているならば、なぜに不条理なことがわれわれに降り懸かってくるのかを問うことである。「そういう矛盾があるにもかかわらず、神は義であり、神のなし給うことは正しいということ、あるいは結局全世界を正しい理法が支配しているのだということ」を納得的に説明し理解しうる理論をもっていなければならない」が、それが神義論である。それは民衆の「魂のみとり」

であり、「生活のすみずみまで入り込んで、彼らの魂の平安のために、さまざまの矛盾を納得的に説明し了解させるといふ役割」を担うのである。⁽¹⁾ 広池においては、それは「因果律論」であり、神の理論がそれを究極的に基礎付けるのである。

さて思うに、そのような「意味体系」(コスモロジー)には、充たすべき条件がある。それには色々とあるが、まず時空の意味構造について述べることである。すなわち、まず万物に意味的空間内での位置(トポス)を与えることである。物質、生命、精神、情報などの理論のほか、人間界について十法界のような人間の品級論、人間の発達論、社会関係論、階級論は、その典型である。

また今一つは、時間軸上に位置づけることである。これは歴史論であり、栄枯盛衰や発展段階論などにみられるものであり、生起する事象についての因果律の意味づけが含まれる。

以上は、人間個々人の運命と、国家、文明の盛衰を研究したスミスなどのモラル・サイエンスの問題意識とまさしく共通する。こう考えると、神の観念は、まず宇宙的地球的な規模での時空のトータルな意味づけ、つまり万物の位置付けの基礎といえるのである。それは、現代的に表現すれば、「コスモロジー」ということになる。いわく、

「私どもは、最高道徳において聖人の教説を採用し、まず宇宙の現象をもって神(本体)の力の表現となし、私どもの心をもって神の心の分霊となすのであります。且つその分霊の行為が本体の霊の法則と一致する場合には、その分霊は幸福となり、然らざる場合には不幸となるものとみなすのであります。かくて人間の一切の精神作用及び行動の根本が神の恩恵であるということになり、いかなる事もすべてこれを神に向かつて感謝することになるのであります。」(⑦二四八―四九ページ)

「自分自身の肉体はじめ森羅万象一切を挙げてこれを神の肉体の一部として尊敬するのであります。」(⑦二四八ページ)

こうして、あらゆる文物、器具や生産物も神の一部とみなし、交際取引の相手方の人間も神の一部分とみなして、ともに大切にするという敬虔な態度、さらに神の法則を明らかにするという科学する態度、そして大自然の調和に気をくばり、人間に役立つ技術を開発する創造的態度が出てくるのである。それゆえ最高道徳は神の原理に基づいて、創造の原理となるのである(⑦二四七ページ以下)。

これは、慎重な注意を要する論点であるが、ここから宇宙的、地球的視野が開けグローバルな見方が生まれて、万物を大切にするという実践が出来、地球環境問題、国際関係問題などへの深くしつかりした視点が提供される。最高道徳は、本来、宇宙的、全地球的なのである。日本は無原則国と非難されるが、こうした深く普遍的な道徳の根底から、地球的問題にも取り組むのである。この点が、神論を基礎にするか否かで、大きく違ってくるのである。神論の現実的意義は、なканづくここにある。

また、一切の事象、生起する事象には意味があるのだというのが、神を根底とする因果律論の含意である。広池は、この宇宙に「偶然はない」というが、それは意味的な因果律論の貫徹を指している。いわく、

最高道徳において神を信ずるということは「神の法則を信ずる」ことである。それは宇宙の因果律を信ずることである(⑦二四三ページ)。

ゆえに「新しい最高道徳の信仰」は、科学的、かつ実的なものである(⑦二四三―四四ページ)。

「最高道徳にて神を信ずるということは神の法則を信ずることであり、神の法則とは自然の法則にて、すなわち宇宙の因果律であります。…これを信じて自我を没却し、もって神の慈悲心に同化して、伝統を尊

び、人心の開発もしくは救済に力を尽くすことであります。」(⑦二四三ページ)
さらに広池はいう、

「自己の運命の成立せる原因を自覚し、併せてその運命の全責任を自己一人にて負うことをもって最高道徳の実行的原理となす」、「自己の運命を自覚して、その全責任を負い、且つ進んで感謝的生活の間にその運命を改善しようとして努力するということが、すなわち最高道徳の実行に入り得る基礎的条件になるのであります」(⑦一七五―七六ページ)。

「私どもの人間の肉体及び運命は外界の力と、自己の祖先及び自己の過去における精神作用及び行動によって出来ておるのであります。故に、自己の不幸なる運命は、これを原因に遡ってその責任を問うときには、社会の罪もあるべく、その家の先祖の罪もあるべく、もしくはその父母の罪もあるうが、しかし現在における自己の運命は、結局、自己自身の全責任に帰して、これを自己一人にて負うほかありませぬ。∴自己の運命を他人の行為に帰し不平もしくは反抗の態度に出ずるものは生涯幸福を得ること無くして終わり、これに反し、すべての境遇を自己の各伝統へ神・君主・父母・聖人その他の恩人への賜物として、満足し且つ感謝しつつ努力するものが、ついに必ず真の幸福に至るのであります。」(⑦一七四―七五ページ)

実際これは、ぎりぎり科学的であり、かつそれでは不可解なところまで含めて対応する、実践的な態度といえるであろう。すなわち、道徳の精神的根本は、因果律を信じていることであり、それは、細大漏らさず人間の道徳的努力に因果律が貫徹し、神の審判が働いているということの自覚である。人間の一切のことがらがそのように意味づけられる。因果律論は「神的・宇宙的意味論」(コスモロジー)なのである。それは一切を宇宙的に考えることである。

ただ、広池の歴史的因果論は、こうすれば滅ぶ、こうすれば栄える、万世不朽になるということを、文明、国家、団体、家族、個人について述べる。けれども、社会体制がどのように推移していくかについての「段階論」的理論(Stage theory)は欠如している。社会主義は失敗するとか、資本主義は困難に陥るとはいうが、それでは次にどんな体制に移っていくかとか、キリスト教などが問題にした世界審判があるかどうかなどは、尋ねてはいない。この歴史論の研究は、今後の課題として残されており、筆者も別の機会に論じよう。⁽²⁾

〈注〉

(1) 神義論については、キリスト教が鋭く議論して来ている。引用は、大塚久雄『社会科学の方法』一三八―三九ページ。

(2) 歴史の動きを説明する理論のために、ウェーバーの方法を意識すると、経済と宗教が二大要因となる。人間は理念と利害状況との緊張関係において動いて行く。利害には内的な名替のようなものがあって身分的状況を規定

し、また経済は外的な利害状況を規定していく。宗教の提供する理念がいかなる利害状況に作用するか、いかに人々をつかんで「肉体化」し、受け入れられるかが、問題である。こうした点については、社会の総合的な変動論の課題であるが、大塚前掲書、九〇―九一、および二二―二三ページ参照。マルクスも哲学が「物質化する」と述べている。

五、道徳の実践論——贖罪(義務)先行と正義および慈悲

かのマルクス・アウレリウスは、「われわれの人生はわれわれの思考がつくりあげるものに外ならない」と教えているが、以上のような法則論、因果論は、その中で生の営みとしての実践のあり方、考え方を指導するものでなくてはならない。その際、最高道徳は、直接善行によって幸福になろうとするのではなく、「目的の間接化」と

もいえる論理を重視するものである、ということに注目したい。それが贖罪論であり、これがまた神の原理とのかかりをもつのである。

この点は、マックス・ウェーバーの宗教社会学でも重視されているところであったが、特にプロテスタントの精神と実践倫理においては、キリスト教の原罪説のゆえに、信仰とは神を認めること、しかもイエスを神と一体のキリスト（救い主）と認めること、キリストの十字架における犠牲をもって人類の罪の贖いと認めること、という根本の信仰箇条がある。

これに対して広池の説はどうであろうか。まず神との関連で、罪の観念が確認される。いわく、

「直ちに聖人の教説に基づき、宇宙の現象をもって神の表現となし、私どもの心をもって神の心の分霊となすのであります。且つその分霊の行為が本体の霊の法則と一致する場合には、その分霊は幸福となり、然らざる場合には不幸となるものと見なすのであります。」（⑦二四九ページ）

ここから重要な観念が生まれる。すなわち神の心つまり自然の法則への背反、不一致が罪であり、その罪滅ぼし（贖罪）が必要であるとの観念が生じてくるのである。社会の法則・法律への違反という罪を超えた根源的な罪の理論が、神の観念から基礎づけられる。だから、次のようにいわれる。

道徳実行の動機目的は「自己の過去における過失及び罪惡の解脱」にある（⑦四ページ）。

最高道徳は贖罪を動機とする。その根本は「神にたいする罪」を贖うことにある（⑦一一九ページ）。

健康、長命、開運、子孫繁栄などは、自己の品性完成ののち、間接に得られるものと考える（⑦五ページ）。特にこのように神の原理から見て、広池は神にたいする人間の罪と、罪からの解脱、贖罪を強調するが、神という人間を超える超越者を戴くことにより、生活に謙虚さ、敬虔さを生む。なかんづく、自分は「これだけ行っ

たのに」という自負から出て来る不満や、救いへの焦りがなくなるといわれる¹⁾。

ちなみに、ウェーバーが述べているところだが、いきなりプラスの価値の実現を約束する教理というものは、現世ではその約束が実現しないから、往々にして信頼と支持を失うものであり、「来世において清算される」という応報的な来世観は、ここから必然となるのである²⁾。ただし、広池は、現世で応報が済まないからといって、決済を来世に延ばすのはあやまりだという。

それはともかく、まずマイナスの価値を取り除くという贖罪論に立てば、現世の範囲でさえ、予期に反する出来事が起こってくるだろう。その際に、「まだ実行が不十分だから、頑張ろう、そうすれば物事は好転する」とさえ考えられるので、罪の償いの程度に応じて、という救いの約束は破綻しない。目前の明るい希望を約束する理論は人々を励ますが、それもあまりに単純思考であると、失敗する。その点、「贖罪論」というものは、努力とそれにたいする報酬という応報的（報償的）正義を否定するのではなく、深め拡張するものであるから、ここに実践を指導する不撓不屈のエートスが与えられるのである。罪とそれからの解脱の希望を説かないものは、浅く弱い思想なのである。そこから本当の希望の理論が出てくる。

また、直接幸福を目指さないで、贖罪（同じ事の表裏だが品性完成）を先にせよ、という論理は、いわば「目的の間接化」であるが、これは極めて重要な意味を秘めている。人間界には、間接化することによって事物がより良く実現する、という迂回生産の論理があると思われる。

ちなみに、次の有名なイエスの教えがある（マタイ六―二五以下）。D・カーネギーも引いている。

「何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさるではないか。空の鳥を見るがよい。まくことも

刈ることもせず、倉に取りいれることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養って下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。…まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」(『道はひらける』創元社、二四〇ページ参照)

これは、最高道徳的に解釈すると、努力をしなくても良いというのではないのであって、ひたすら自然の法則(神の義)にしたがい義務先行せよ、そうすると結果は自然に与えられるというものである。思いわずらうとは、神の義(法則、心)にしたがって義務先行しないで、間違った方法で行為し、焦って結果を求める心なのである。人事を尽くして天命をまつのでなく、「天命に従って人事を尽くす」(広池)のである。

では、このように実践される道徳は、大宇宙の中の人間界にどんな状態を実現することになるのだろうか。

最高道徳の基礎的観念の第一は、正義と慈悲であって、「正義」が道徳の帰着点であり、「慈悲」が道徳実行の基礎観念であるとされる。まず、目指すべき状態(個人的および社会的)は正義であり、それは万物における平均と調和である。広池いわく、

自然法は神の心の表現にして、その本質は正義もしくは中庸にある。この正義は「宇宙的正義」と呼ばれる。(⑦五三ページ)。

さらに言う、

大自然の目的は、一切の万有の相互の平均と、万有各個の内部の平均すなわち調和にある(『広池千九郎モラロジー選集』一、「根本原理」四六九ページ)。

最高道徳における人心の開発救済は、人間社会の不平均の有様と人間の心の中の不平とを平均して、人間の心に安心と平和を与えようとする仕事なのである(同上、四七〇ページ)。

次に最高道徳は、神に淵源する道徳であって、上述のように宇宙は神の心身であり、人間もその一部とされることから、万物への「神の平等愛」という理想が掲げられる。それは、特にすべての人間にむけて平等の慈悲を実践しなくてはならないことを物語る。

最高道徳とは、自己の最高品性を形成せんとする動機目的から出発する道徳である(⑦四ページ)。

その「最高道徳的品性」の模範は「世界諸聖人の聖徳」であり、実行の理想は「人類及び万有にたいする神の平等愛」に達することである(⑦一一九ページ)。

そして、この正義の目的を実現するには、慈悲をもってその方法とする。慈悲は以下のような特性をもつとされる。

「宇宙自然の法則すなわち神の心たる慈悲」をもって道徳実行の標準とする(⑦七ページ)。

道徳実行の動機目的を神の慈悲心に一致させ、自己の道徳実行の結果を神に捧げる(⑦二〇ページ)。

神の実質は慈悲であり、その作用は自然の法則であって、神を信ずるということは神の定めた法則を実行することであり、それが慈悲の実行である(⑦二三九ページ)。

「慈悲」とは、神本体の存在を信じ、因果律を信じ、伝統報恩³⁾し、人心開発救済に努める、という精神で個人、団体の幸福、事業の完成を図ることである(⑦八八―八九ページ)。

神を信じるから、この慈悲は純粹であり、また伝統の原理があるから軽重を弁えて公平である(⑦八九―九〇ページ)。

道徳実行の努力・犠牲は、三方よしになることを確かめつつ行っていくのである(⑦二二〇ページ)。

人間に神の慈悲心を体得させて、一切の問題を人間の慈悲心に訴えれば、個人の精神にも、家族の間にも、

各団体の間にも、国と国との間にも、真正且つ永遠の平和が出来る(⑦二二六ページ)。
 広池の最高道徳実践論は、これを要するに、各人各団体が、自己の運命とそれを決める罪の現状の程度を自覚反省し、宇宙的な正義という目的を実現するために、慈悲を方法として、希望に満ち、生き生きとして歩むという生き方である。

〈注〉

(1) Max Weber, *Religionssoziologie*. 邦訳『宗教社会学』創文社、一九二一ページ参照。

(2) 罪ということについて、キリスト教の立場から、内村鑑三は、次のように述べている。罪の罪とは、殺すこと、姦淫すること、偽りの証言をすること、などではない。罪の罪とは「夫は反逆である。即ち人が神に対して犯したる反逆の罪であるのである。これが罪の罪であって、すべての罪の本である。」「反逆は前にして破戒は後であつたのである。」「(罪とは何ぞや)全集十七卷、二七〇ページ)。改心、回心とはこの反逆から向き直ることである。

広池では、罪は「自然の法則」に対する違反、破戒でもある。それは、神の心からの離反である。スミスは自然ということを盛んに述べたが、それは事実上の自然必

然の世界(リングが木から落ちる)という意味と、そあるべきという価値的な自然必然の世界(神聖なあるべき権利など)という意味とがある。この点、両者があるというのみでなく、双方がどう関係するのかが問われるべきであろう。高島善哉『アダム・スミス』岩波新書、一一三ページ。

(3) 「伝統」の原理とは、広池のモラロジーにおいて初めて詳しく展開された。それは道徳の生命的・社会的構造を説明するものである。人間が慈悲の精神で一切に当たるのは、「宇宙の一員としての義務」をつくすことであり、それが贖罪・品性完成になるが、そのとき伝統を祖述(受け継ぎ発展させること)しながら義務を行うということが肝腎である。広池のいう「伝統」とは、宇宙の組織原理が、人間界にあらわれたものであるとされる。

伝統とはなにか。それは次のように説明される。

「神(本体)及び聖人より直接にその精神を受け継ぎておとるところの一つの系列の総称」であり、人間の肉体的精神的生活を創造し進化させて来た純粹正統の系列である(⑦二二六ページ)。

そして、人間生活の諸領域には次のものがある。

- 家族生活
- 国家生活
- 精神生活

またこれに職業(物質)生活を加え、それぞれに「伝統」が存在すると見ている。伝統の原理(およびその完成としての人心開発救済)の詳しい説明にはここでは立ち入らないが、このように人間生活の全体構造をふまえた道徳実践(慈悲の実践)が説かれるので、神の原理に由来する最高道徳は、具体的な、個人の安心立命の方法であるとともに、また団体改善の真の方法、平和の方法を視野に収めているのである。

六、人間進化の理想——聖人の徳の称賛と永世論

人間に生きる意味をあたえる意味的宇宙論(コスモロジー)では、根本的な価値規準、理念として、宇宙における人間の進化完成の方向が示されねばならない。あらゆる有力な思想というものは、そうした理念を提供する。

なお、ウェーバーは儒教倫理の特質のひとつとして「伝統主義」(Traditionalismus)という特質をあげている

が、それは「およそ過去にあったことから一つの絶対的な価値基準とし、絶えずそれに従って行動しようとすること」(大塚前掲書、二〇八ページ)であるとされる。広池によれば、最高道徳は従来の生き方、道徳について、原則上次のように考える(⑦二三三ページ)。

① 従来の道徳の動機・目的・方法の根本を最高道徳に変える。

② 普通の道徳の形式をなるべく完全に実現して、その上に漸次に最高道徳の精神を加え、さらにこれを美化して表現する。

ゆえに最高道徳は、伝統を尊重するが、それは堅實的、調和的、漸進的、美的、平和的な方法をつうじて発展させるのである。これは新たな「現世合理化論」にはかからない。

それは古来、多くの場合宗教では来世の救いの問題であるが、最高道徳では救いであるとともに、現世の世俗的な人間進化向上の問題である。

広池の最高道徳には、人類の歴史としても、また現在の個人としても、人間進化論がある。

先にみたように、結局、神の存在といっても、それは、聖人の偉大な人格と道徳を通じてはじめて認められるようになったとするのが最高道徳の立場であり、転じて、人間が聖人さらには神になりうることも見るのである。それは、以下のような命題に表れている。

なによりも聖人の教説を体得して、神の存在を信ずる (⑦七ページ)。

神を人格的存在と見る。すなわち、「宇宙の現象を科学的に研究して得たところのあらゆる自然の法則が激^{はげ}たる生命を有しておる有り様を見るとき、いっそうその本体が人格を有して生きておるといふことごとき感を生ずるのであります。」(⑦三三六ページ)

神の精神を伝えるものは、聖人の教訓と純粹正統の学問である (⑦一一ページ)。

今後は、一般民衆がみな最高道徳を實行して聖人のようにならねばならない (⑦四七〜四八ページ)。

「尋常人の偉大なるものが最高道徳を實行すれば聖人となり、聖人さらに最高品性を造ればついに神となるということはおのずから明白であります。神の品性すなわち道徳上の地位を右のごとくに見るときには、神は絶対ではなくして、人間と相対的の関係にあつてその最高位に位するものであります。さすれば、すべて世界の人類は何人にもその精神の向上によりて品性の向上を生じ、その品性の向上はついに聖人もしくは聖人以上に進み得ることを示したものであつて、おのずから人間の発展の無限なることを示したものであるのであります。」(⑦二五九ページ、追加文)

「本体がこの現実の社会に人間としての形体を具えて現れたもの」という見方は、一般人の理性には合わない。現神の絶大な道徳実行の結果、その現神が宇宙根本唯一の神と同一視されるようになったものと考えられる (⑦二二八ページ以下)。

ここは重要なところである。根本の神があつてそれがこの世に特定の偉大な人間として現れるというより、人間が向上すれば聖人となり、究極は神とさえ見られるようになるのである。いわば「人間が神になる」というのではないだろうか。もっとも、これは私の解釈のしすぎかもしれない。「人間が神に同化する」といふべきかも知れない。

キリスト教では、イエスをキリスト(救世主、神の子)と認めよと教える。三位一体説により、それと同時に、イエスはエホバと一体なりと認めることになる。イエスという聖人(現神)を通じて神を認めることになる。孔子では、先立つ歴史上の伝統(先王、聖人)を信じ、それを弟子がまた信じる、ということになっている。広池は、そうした人格的感化とともに、科学の思考からも超越的・統合的・存在的なものの働きを合理的に推測するという立場である。これは現代人の最大公約数ではないか。いわば宗教と科学との出会いであり統合の方法である。

だが、この見方は、キリスト教などのような一神教と対比すると、「被造物神化」という最大の罪であると思われるであろう。人間は神になどなり得ない、神と人間には、越えがたい断絶があると。

先の大塚教授によれば、ウェーバーにおける儒教とピューリタンの倫理の比較について、以下のように説明される。儒教倫理では「罪の觀念がまったくちがう」のであり、罪といつても「根源的な悪なるもの」などではないのであつて、「伝統的な儀礼や手続きを守らず、秩序と調和を敗るること」である。だから何らかの方法で償い

るわけである。「現世も、生まれながらの人間も、無限に完成して行く可能性をもっている。」これにたいして、プロテスタント倫理は、人間性にかんする「ある意味では極端なまでのペシミズム」であり、現世は完全に被造物的に墮落しており、現世は「いわば涙の谷であるばかりではなく、やがて終わるべき旅路に過ぎない。」まさに現世拒否であるが、そこからまことに厳しい自己統御と、現世合理化、変革へのすさまじい強さが出てくる。職業も、そうした現世合理化のいとなみとしての「神の召命」「神から与えられた使命」(calling)である。「神の道具となって、現世の只中においてその栄光を増し加え、隣人愛を実現していく」という思想である。

人間向上の理想である「君子」の特質についても、儒教では楽天的なもので、「世界秩序を支える理法」である「道」にしたがって生きればそこに「徳」がたかまる。君子は罪に苦しむ人ではなく、「本来的に幸福」な人なのである。君子は伝統的秩序を破壊せず、それを維持する「調和のとれた人」であるといわれる。現世変革への動機も熱情も弱い人である。¹⁾

こうしたウェーバー的な儒教解釈は、かなり一面的で、正確でなく、問題があろう。天の理法とか天命というものへの没入の境地がよく理解されていないと思うが、しかし、「中国儒教」と日本人のわれわれの雰囲気からつかんだ「日本の儒教」なるものとを、混同してはならないのかも知れない。

広池の説く最高道徳では、先にも述べたように、罪の觀念が深く、神への罪から出発し、贖罪のための努力が道徳に外ならないので、現世合理化も、過激にはないが、たえまなく続けられるのである。それは現世を神の平等愛へと近づけようとするのであり、宇宙的な正義を実現していくことが目的であり、その方法が慈悲なのである。

次に、以上のような基本的理想は、同時に人間の現世と来世というものの関連はなにかというさらなる問いへ

と誘う。すなわち人間の究極的な問いは、人間の魂と生命にかんする問題である。すなわち生死観である。孔子は怪力乱神を語らずと口をつぐみ、釈迦は生のことさえ悟り尽くせないのに、どうして死後のことを語れようかと論じたとと言われるが、広池は靈魂の問題に言及している。

岸本英夫によれば、一般に人間は死に臨んで次のように考えられている(『死を見つめる心』講談社文庫)。

- ① まず自分の肉体の生命の延長を試みる。それはだれもが、病気になる、少しでも良くなるようにと、治療することに表れている。
- ② しかしながら、それがどうせ適わない限りあるものと悟れば、次は自分の生命を受け継ぎその代わりの生命となるものに託そうとする。
- ③ だがそれも、所詮、他人は他人である。ゆえに自分の肉体は滅んでも魂というものがあろうと考えるようになる。自己の魂の永遠を願うようになる。
- ④ けれども、それは確かなものではないのではないかと感じられる。そこで、結局確かなのは、自分が今ここに生きて居るといふ事実であり、そこにこそ永遠がある。瞬間瞬間の無我の営みにこそ永遠があると考えるようになる。

最高道徳の神の原理では、どうなるであろうか。それは、宇宙が神の心身であるとする。その宇宙は永遠であるから、宇宙の一部である人間も「永遠の生命」を実現することが理想となり、願望となるのである。

その場合、一人一人の魂は死後どうなるのかという問いが、当然立てられる。それに対し、最高道徳では、靈魂不滅説を合理的と認める。神の心(霊)の部分(分霊)である人間の霊は不滅である、ということになるのである。それは一種の「信仰」といえるものだが、それを合理的なものと認めるのである。広池千九郎いわく、

最高道徳は靈魂不滅を真理として肯定する。しかし、それを認められない人は、靈魂不滅とは、広池自身の「学力・知力・経験・信仰ならびに道徳などの結成せる中心観念すなわち全人格の永遠性に関する肯定」といつてもよい（以上⑨六三―六四ページ）。

広池には、死後も自分の靈魂は働き、神とこの世の人間との間を往復して、最高道徳を実行する人々の願いを神に取り継ぐ、という阿弥陀如来的な信念が窺われる（前掲『モラロジー選集』三、「神壇説明書」五二ページ）。

しかし、加えて重要なことは、またこの靈魂不滅論とともに、「子孫繁栄」という現世における生命の永続発展が求められていることである。これは、最高道徳では二重の意味における永遠の生命の実現が理想として掲げられていることを意味するものである。

マックス・ウェーバーは、その『宗教社会学』において、世界の高等宗教が現世的か来世的か、合理的か非合理的か、現状変革的か、現状逃避的かといった傾向をもつことから、それらに基づいて人々の生き方を分類している。

たとえば、キリスト教は、本来救いは現世的でなく来世的であり、来世において神のもとに永遠の生命を与えられるというのを願うのであるが、同時に救いに至る道は針の穴にラクダが通るよりも難しいとするから、現世の生き方が厳しく制御され、神の教えにしたがって神（そしてイエス・キリスト）への愛、および隣人愛の実践に、ひたすら自己を没入することになり、また現世が不合理を含む限り、現世の合理化に努めることになる。

あるいは釈迦の教えでは、苦しみに満ちた現世から抜け出るには、貪瞋痴という無明の境涯から慈悲の境地へと至らなければならない。それは仏の働きを信じ、仏に従って現世を生きることにある。すなわち八つの正しい

道を進むことであるとせられる。ただ釈迦の場合は、キリスト教と比べて現世変革という面が弱いといえる。内面の変革が外界の変革につながるか、あるいは内面に止どまるか、いずれも変革なのではあるが、そこに長い歴史過程では大きな差異が生じる。それが文明の相違にもなる。

最高道徳は、その点、精神で実行するといわれるように、まず精神の変革を基礎とし、次にその変革された精神に立って行為して行くから、現状を変革することになる。そのとき立派な精神でもって変革するか、低い次元の精神でもって変革するかが問題なのである。「まず精神を造り、しこうして形を造る」という言葉を、広池は述べている。最高道徳は、合理的であり、現世変革的であり、子孫繁栄という現世的かつ未来的な価値を立て、また靈魂不滅という来世的な未来を考えるものである。

これは、ウェーバーが検討した世界宗教における価値理念とエートスとについて、科学に立脚して隠遁的、不合理的なものを除き、合理化しつつ現世の瞬間瞬間を生き切るのである。広池は、「我これを為すにあらず、ただこれに服するのみ」という境地を教えているが、それはこのように極めて敬虔、篤実、かつ創造的な生活態度を語るのである。それはまさにウェーバー的には「内面の品位」――広池はそれをサミュエル・スマイルズにしたがう「品性」(character)という――を高めるつとめに邁進する人である。それは「内なる人」であり、「新しく生まれた人」（大塚、一六八―六九ページ）といつてよいのである。

〈注〉

(一)大塚久雄『社会科学の方法』一七二―七三ページなどを参照。プロテスタントにおいても真の道徳が信仰を基礎

にした所から生まれる。真の信仰から現世の生き方である真の道徳は生まれるのである。

七、道德進化の道

広池の最高道德における神の議論は、以上に見てきたように、道德の究極的基礎となり、全地球的な視野で、個人から国家、国際関係にまで行動基準を示すものとなっている。それは、従来の世界的な宗教が取り組んで来た問題すべてに、科学をはじめあらゆる知識と経験を総動員して、新たな方法で取り組むものといえる。

ただし、純論理的には、そうした本体なるものに「神」という言葉を使うかどうかは、意見が別れよう。あるいは天、天地自然、大自然、あるいはデウス、仏、大日、アツラー、超越、X、アルファ、そのほか何か絶対的包括者を表す他の言葉でもよいであろう。ともかく何らかの究極的な絶対者を設けなければ、意味的な体系が完結しえないことは確かである。人類最高の道德はそれなしには基礎付けられない。

ただし、忘れてならないことがある。すなわち、言葉というものは記号として、何かを表すに最もふさわしい表現があるということである。特に、仏でも天でもなく、また新しい言葉でもなく、あえて神という古くからの言葉を使用するのには、深い意味があると考えなくてはならない。実は広池千九郎は、自我にせよ、慈悲、伝統、救済、そのほか従来の言葉に意味革命を行っているのである。ただし、神という言葉を用いることにより、この言葉にまつわる様々な余分の情報がつきまとうことは、避けられまい。ここに「神々の争い」の由来もある。「シンボルを操る存在」たる人間の宿命であろう。

かくして最高道德は、一般の「宗教」の価値を否定しないが、特定のそれとかわりをもたなくても良い、ただし「真の信仰」は道德の基礎として不可欠である、という立場である。その意味で、神なしの道德は最高の道德ではないわけである。

広池のモラロジーは、神を基礎とする最高道德を通じてこそ、人間の形而下と形而上の、また現世的と非現世的との双対的な次元における、願望、利益に、ともに応えようとする体系となつているといえる。また、最高道德は、科学の価値を万能とは見ないが高評価する。科学も含め、人類のあらゆる形態の叡知を調和的に統合し活用するというのは、総合的、合理的態度であり、これからの人類に普遍的となる。

現代われわれは、真の道德は、真の信仰および真の科学と相互補完的であり、一層高い価値を表しうるものといえるのである。

〈注〉

(1) 人間の生き方をアリストテレス的、カント的な意味で実践とみれば、それは自然必然の法則世界において、人間が価値(目的)の自由世界における理想(目的の王国)というものを切り開くことである。それは、さまざまな法則群からいくつかの法則をとりだし、それを意志によって自己と統合しつつ巧みに組み替えて目的を実現していく。これが自然界、物質界に向かうと技術となり、人間界に向かえば道德となる。人間個人個人は自然界と人間界と同時に二重的に住むから、技術と道德とは、一つの根源から発する一体のものでなければならぬ。広池の最高道德と神論は、そうした人間の営みに意味的統合を与えるものである。この科学、技術、道德の関連は、

認識論と実践論についての基本的論点であるが、アリストテレスの『倫理学』と『政治学』、カントの『批判』、『道徳形而上学』等、三木清『構想力の論理』、それに難波田春夫『社会哲学』(著作集、早稲田大学出版部)、田村正勝『社会科学のための哲学』(行人社)、などを参照。

私は、こうした科学(認識)、実践(行為)を媒介するものとして、記号(内言語、外言語、行為形式、シンボル)世界の役割を重視したい。目に見えない法則(拱理)と、見える記号との双対(そうつ)世界に、人間は生きていく。パスカルなどが述べたように、人間は「中間存在」である。だからこそ現世と来世、神聖と世俗との分裂に悩み統合へと駆り立てられる旅人にほかならない

のであろう。技術と道徳とは、記号（シンボル）を媒介として考察されねばならない。情報の重要性が高くなつた今日は、ことにそうした視野の発展が求められよう。